

長命寺湖底遺跡発掘調査概要

— 近江八幡市 —

1984

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

本県の発掘調査の特色の1つに、湖底遺跡の発掘があります。

我国最大の湖である琵琶湖は、世界の湖沼の中でも、その誕生史がもっとも古い湖の1つとされています。とりわけ縄文時代以後は、今日まで、この湖を中心に幾多の人々が湖とともに生活を営み、その歴史に厚みを加えてきました。また、人々の生活の変化は勿論ですが、この湖自身も生きもののように変化し、湖岸線が前進、後退を繰り返してきました。しかし、その原因は水位の変動によるものか、土地の変動によるものかは明らかではありません。

今回の調査は、このような琵琶湖の変貌の結果に生じた湖底遺跡の発掘調査であり、多数の新たな知見を刊行することにより、本県の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、この調査に御協力をいただきました地元関係者、および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申しあげます。

昭和59年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長

外池忠雄

例　　言

1. 本書は、水資源開発公団の実施する長命寺港改修事業に係る長命寺湖底遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 本調査は、水資源開発公団の依頼により、滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会が実施したものである。
3. 調査および整理・報告は、滋賀県教育委員会の指導のもとに、財団法人滋賀県文化財保護協会調査課技師宮崎幹也が担当した。調査組織は次の通りである。

調査指導　近藤　滋（滋賀県教育委員会文化財保護課主査；昭和 58 年度）

　　兼康保明（　　〃　　〃　　〃　　技師；昭和 57 年度）

主任調査員　宮崎幹也（財団法人滋賀県文化財保護協会調査課技師）

嘱託調査員　中川正人（滋賀県埋蔵文化財センター；保存科学）

調査員　寿福　滋（写真撮影）

　　和田光生（大谷大学OB）

調査補助員　深井　圭（駒沢大学OB），広瀬幸男（大谷大学），池田俊哉，亀塚　修（以上龍谷大学）

事務局　江波弥太郎（財団法人滋賀県文化財保護協会事務局長）

　　松本暢弘（　　〃　　〃　　〃　　主事；昭和 58 年度）

　　立入裕子（　　〃　　〃　　〃　　主事；昭和 57 年度）

4. 現地での発掘作業については、水資源開発公団の委託をうけ、東洋建設株式会社が実施し、秋村組（近江八幡市）の協力を得た。

5. 調査実施にあたっては、地元長命寺町の協力を得た他、専門各関係者に多大な助言を受けた、文末ながら記してお礼申しあげたい。

目 次

序文

例言

第1章 位置と環境	1
第2章 調査の経過	2
第3章 調査概要	5
1. 第1次調査	5
2. 第2次調査	6
3. 第3次調査	8
第4章 出土遺物	12
第5章 まとめ	20

挿 図 目 次

図1. 遺跡位置図	1
図2. トレンチ配置図	3
図3. 第1次調査区地形図	5
図4. 堆積層位模式図	6
図5. 丸木舟概略図	7
図6. 第2・3次調査区地形図	9
図7. 第II層出土遺物実測図	17
図8. 石製品実測図	18

写真1. 調査トレンチ内の漏水状況	2
写真2. 上層出土遺物	16
写真3. 繩文晩期の丸木舟	24

図版目次

- 図版 1 上 調査前状況（東より）
下 鋼矢板設置状況（第3・4トレンチ）
- 図版 2 上 調査風景（第7トレンチ）
下 土層堆積状況
- 図版 3 上 遺物出土状況（縄文式土器）
下 遺物出土状況（縄文式土器）
- 図版 4 上 遺物出土状況（弥生式土器）
下 遺物出土状況（櫛）
- 図版 5 上 第8トレンチ調査状況
下 丸木舟出土状況（北西より）
- 図版 6 出土遺物（縄文時代後期）
- 図版 7 出土遺物（〃）
- 図版 8 出土遺物（〃）
- 図版 9 出土遺物（縄文時代晚期）
- 図版 10 出土遺物（弥生時代前期・中期）
- 図版 11 出土遺物（弥生時代前期・中期）
- 図版 12 出土遺物（縄文式土器・弥生式土器）
- 図版 13 出土遺物（弥生式土器・古式土師器）
- 図版 14 出土遺物（石器）
- 図版 15 遺物実測図（縄文時代後期）
- 図版 16 遺物実測図（〃）
- 図版 17 遺物実測図（縄文時代晚期）
- 図版 18 遺物実測図（〃）
- 図版 19 遺物実測図（弥生時代前・中期）
- 図版 20 遺物実測図（〃中期）
- 図版 21 遺物実測図（弥生時代中・後期）
- 図版 22 遺物実測図（古式土師器・土師器・須恵器）

第1章 位置と環境

長命寺湖底遺跡は滋賀県近江八幡市長命寺町地先に所在する。近江八幡市の中央北部にそびえる鶴翼山（八幡山）から西方を望めば、東に大きく円弧を描く湾状の入浜があり、その北端には、湖中にせり出すような形で標高 424.7 m の長命寺山がそびえたち、その南端中腹には西国札所第 31 番の長命寺が立地している。今回の調査の対象となった長命寺湖底遺跡は、長命寺参道の石段下一帯の港を中心に広がっている。

長命寺を北端とする湾状の入浜には、東部に縄文・弥生時代の土器が散布する大房湖岸遺跡があり、南方には、縄文時代後期の丸木舟計 6 隻の出土をみた元・水茎遺跡や佐々木六角氏の被官であった九里氏の築城と伝えられる岡山城方面から長命寺方向に流れる潮流により形成された砂洲が連続的に見られ、その背後に水茎内湖・津田内湖などの後背湿地が広がっていたが、昭和 20 年以降の干拓事業により、景観は一変している。

この湖岸一帯には、古くより遺物の散布が知られており、江戸時代末期の奇石蒐集家であった木内石亭の著書『雲根志』の中にも、長命寺付近の湖底から、石鐵が発見されたことが記されている。

1. 長命寺遺跡
2. 大房湖岸遺跡
3. 岡山城遺跡
4. 元水茎遺跡
5. 新畠湖岸遺跡
6. 白王 A 遺跡
7. 円山城遺跡
8. 南津田北遺跡
9. 北津田向山遺跡
10. 北之庄城遺跡
11. 大江遺跡
12. 豊平橋遺跡
13. 八幡山城遺跡
14. 塚町遺跡
15. 高座遺跡



図 1. 遺跡位置図

第2章 調査の経過

長命寺湖底遺跡の付近は、古くから土器の出土が知られており、昭和48・49年度に滋賀県教育委員会がおこなった湖岸・湖底遺跡の分布調査によって、その範囲が推定されていたが、今回の長命寺港改修工事に先立って昭和57年度に、湖底の状況を確認する目的で試掘調査が実施された。

試掘調査は、図面上で工事対象地に10m方眼の座標を設定し、この座標点を20m毎に、千鳥型で試掘した。調査は、鋼管とハンマークラブを用いて台船上から実施され、108点の調査箇所で土層柱状図の作成と遺物包含層の確認がおこなわれた。その結果、水深2mの範囲内で多数の遺物が検出されたため、昭和57年度末より本調査を始めた。

本調査は、昭和58年3月1日より開始し、昭和59年3月25日をもって終了した。調査の内容は次のとおりである。

第1次調査 西護岸壁沖出工区（昭和58年3月1日～昭和58年4月29日）

第2次調査 北護岸壁沖出工区（昭和58年5月5日～昭和58年7月8日）

第3次調査 港内浚渫工区（昭和58年

8月1日～昭和59年3月25日）

調査面積は3次の合計が6048m²になり、調査土量は約7800m³になった。

この3次にわたる調査の結果、水面下約3m前後の青灰色粘土層の直上面まで、遺物の出土が確認され、旧地形の復元と現在に至る上層の堆積状況、さらには、琵琶湖の水位の変動を把握する好資料を得ることができた。

また、出土遺物は縄文式土器・弥生式土器・須恵器・土師器・綠釉陶器・灰釉陶器・石器・木製品・丸木舟などバラエティーに富んでおり、その総数は遺物整理用コンテナ・パットで約150箱に相当し、目下整理中である。



写真1. 調査トレンチ内の漏水状況

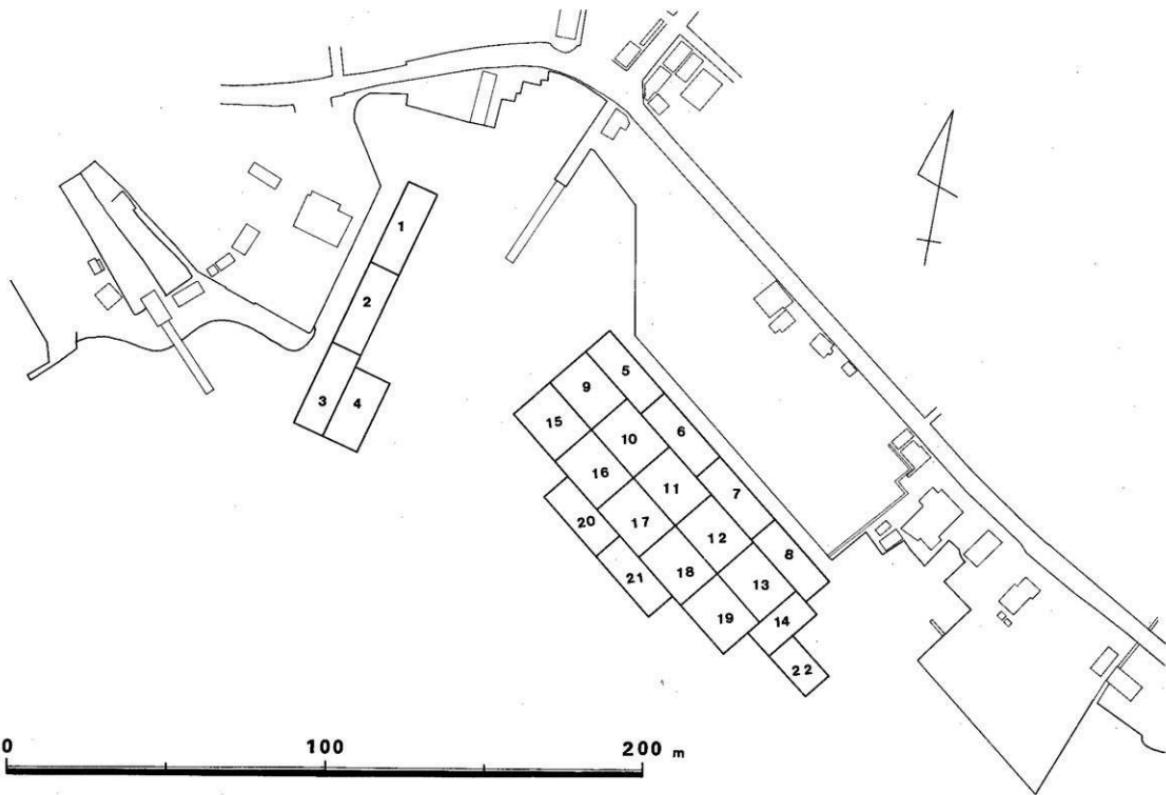


図2. トレンチ配置図

第3章 調査概要

1. 第1次調査

第1次調査の対象となったのは、西護岸壁の沖出工事に係る箇所であり、第1トレンチへ第4トレンチの4ブロックに分け、合計1128m²を調査した。

調査は、鉄製鋼矢板（S P - III型；l = 11.0 m）で自立式の仮締切をした後、6インチ・サンドポンプと8インチ・ポンプを据付け、終日排水を続けながら実施し、人力による発掘の後、電動ベルトコンベアードトレンチの外側に排土した。

調査の当初は土層観察用の畦を鋼矢板の内面に設定したが、鋼矢板の接続部からの漏水が激しく（写真1）、また、排水溝を4周に設けたため不都合が生じ、トレンチの中央部で交差する南北・東西の層位堆積を記録しながら調査した。

層位は、琵琶湖の水面（T.P +84,371 m）から下1mぐらいから約10cm程の泥砂層（第I層）があり、第II層・黄灰色砂層（約1m）、第III層・砂礫層（約60cm）、第IV層・スクモ層（約10cm）となり、地山の粘土層となる。この地山は、黒褐色を呈するスクモ混じりの有機質粘土であるが、約30cmの厚みを持ち、次の青灰色粘土層へと推移する。第1次調査の調査区のほぼ全域では、この黒褐色粘土層が地山となるが、第4トレンチにおいては、直接、青灰色粘土層が露頭する。

遺物は、第I層（泥砂層）・第II層（黄灰色砂層）中に、弥生時代中期の土器から、近世の湖東焼に至るまでの時代幅のある遺物が含まれており、第III層（砂礫層）・第IV層（スクモ層）中に縄文時代後期の土器が

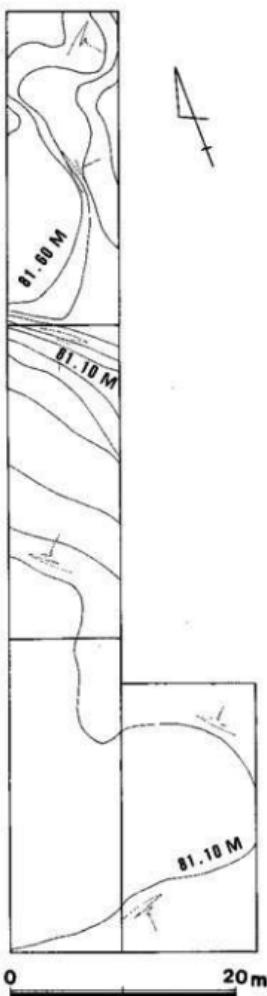


図3. 第1次調査区地形図

包含されていた。この土器は縄文時代の後期初頭にあたる中津式併行期のものであり、今回の調査で最も古い時代の遺物である。この第1次調査区では、縄文時代後期の土器のみが出土し、晩期の土器は確認されなかった。

2. 第2次調査

第2次調査の対象となったのは、北護岸壁の沖出工事に係る箇所であり、第5トレンチ～第8トレンチの4ブロックに分け、合計 1048 m³を調査した。

調査箇所は、集落の隣接する現在の護岸から 8 m 程離れたところであるが、非常に浅瀬になっており、水面下 60 cm 近くまで土砂の堆積しているところも見られた。また、東寄りにある第7・8トレンチでは、人頭大以上の碎石が数多く転石しており、調査に支障をきたした。

基本的な層位は、第1次調査区とほぼ同じであるが、1部で、砂礫層が細分される点と、スクモ層が認められなくなる点が相異し、第I層（泥砂層）・第II層（黄灰色砂層）・第III層（砂礫層）・第IV層（淡灰褐色砂層）・第V層（砂礫層）・第VI層（暗灰褐色砂層）となり、地山の粘土層へと続いている。

地山である粘土層の上面は、西端の第5トレンチで標高 81.000 m を測るが、東へ行くにしたがって低くなり、第7トレンチでは、81.000 m 以下になる。

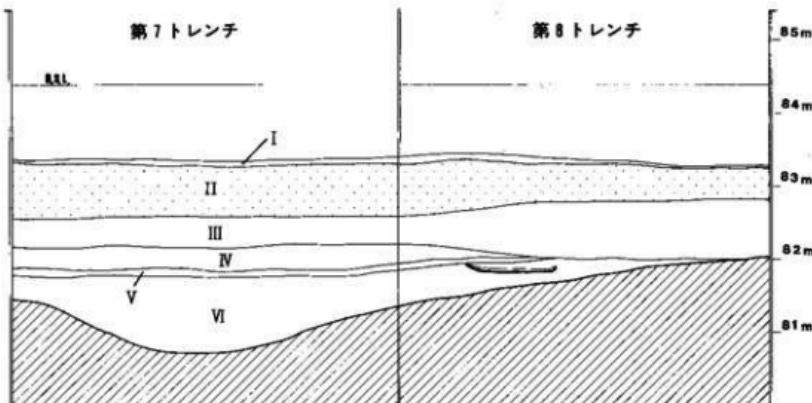


図4. 堆積層位模式図

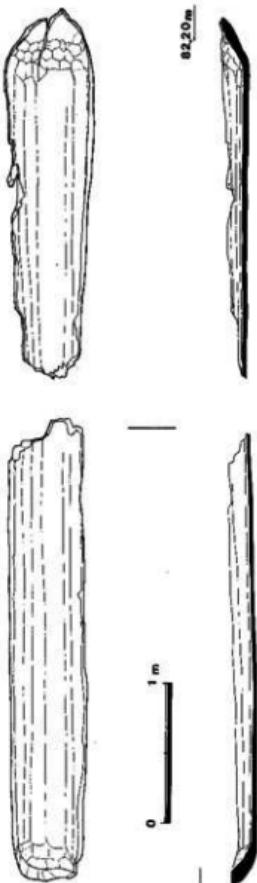


図5. 丸木舟概略図

逆に第8トレンチでは、この地山が標高82,000mまで高くなってしまい、第6トレンチの東端から第8トレンチの中央部に至る約40mの間が、入り江状の落ち込みを呈していることが明らかになつた。

地山の粘土層は、標高81,400~81,800m前後の箇所が、スクモ混じりの有機質粘土層で黒褐色を呈しているが、その他は青灰色粘土層が直接に露頭している。

遺物は、第I層と第II層中のかなり深いところまで、戦後に廃棄された旧日本陸軍使用の銃の弾丸が出土しており、新しい時期の遺物でも、水中においては層位中の下の方に入り込む様子が窺えた。第II層の黄灰色砂層には、非常に表面の磨滅した縄文式土器の他に、弥生式土器、庄内・布留期の古式土師器、飛鳥時代の土師器、平安時代中期の須恵器・土師器、綠釉陶器・灰釉陶器、中世の黒色土器・陶器などが含まれており、中でも、幾内第IV様式に併行する弥生式土器の受け口状口縁を有する甕が多く出土しており、器壁外面に煤を多量に付着させた残りの良いものがある。

第III層~第VI層に含まれる遺物には、縄文式土器と弥生式土器がある。

縄文式土器には、後期中葉のものと、晚期後半のものがある。土器の型式差は層位によって区分されず、出土地点によって異なる傾向が見られる。調査区の西端にあたる第5トレンチでは、後期・晚期の土器が同一層内で出土するが、東端の第8トレンチでは、晚期の土器のみが出土する。

後期の土器には、中葉の土器が見られるようになり、第1次調査の出土遺物よりや

や新しい傾向を示す。また、第1次調査では確認されなかった晩期の土器が出土し、滋賀里IV式・船橋式が主流を占めるようになった。

弥生式土器には、畿内第I様式・第II様式のものがあり、縄文式土器と比べて表面の磨滅が激しく、他所から流入した遺物とも考えられる。

土器以外の遺物としては、丸木舟があげられる。これは、第VI層（暗灰褐色砂層）中から検出されたもので、縄文時代晩期の滋賀里IV式の土器と共に出土した。この層の上方には、砂礫層が厚く堆積しており、同層精査時に設定した内排水路によって、丸木舟の1部を破損していた。舟は、全長6m20cm、幅60cm、厚さ2cmを測り、径80cm以上の丸木を焼きながら削り抜いて製作したと考えられ、舟の内側に焦痕や手斧痕を残していた。この丸木舟は、保存処理をおこなうために、発泡ウレタンによる梱包後、現地から取り上げ、滋賀県埋蔵文化財センターに搬出し、現在、PEG樹脂処理の準備中である。

3. 第3次調査

第3次調査の対象となったのは、港内の浚渫工事に係る箇所であり、第9トレンチ～第22トレンチの14箇所に分け、合計3870m²を発掘調査した。

湖底の深さは、南よりの沖側に行くにしたがって深くなるが、地山である粘土層の絶対高は第2次調査とほぼ同じで、土層の堆積のみが薄くなかった。

層位は、第1次・第2次調査の基本層位とほぼ同じで、第I層（泥砂層）、第II層（黄灰色砂層）、第III層（砂礫層）、第IV層（暗灰褐色砂層）となり、1部で、第III層が細分されたり、地形の傾斜するところでは、第IV層下に暗青灰色荒砂層が認められる。

第II層の黄灰色砂層中には、弥生式土器（第IV様式）～中世の黒色土器が含まれるが、北岸に隣接する第2次調査区よりも、出土量が減少する。第III層（砂礫層）・第IV層（暗灰褐色砂層）中には、縄文式土器（後期・晩期）、弥生式土器（第I様式・第II様式）が含まれており、第2次調査区より遺物の出土密度が高い。

地山の粘土層からは、西方・中央・東方の3箇所に地形の高まりが認められ、入組んだ入江が確認された。西方の高まりは、第15トレンチを中心としたもので、さらに西方の第1次調査区の方に延びる。中央の高まりは、第10トレンチを中心として北へ延び、旧汀線付近と考えられる標高81.800mで、舟を漕ぐ際に用いる木製の櫂が出土



図8. 第2・3次調査区地形図

した。これは、第8トレンチの丸木舟の出土地と50m隔てて対岸にあたり、同一標高である。また東方の高まりは、東端へ行くほど高くなり、第22トレンチでは標高82.300mを測り、遺物の出土量が極めて多い。

遺物は、土器・石器・木製品から構成される。

土器のうち、縄文時代後期のものとしては、東端部の第14・22トレンチから、末葉の宮窓式併行期のものが出土しており、後期全般で西から東への移行が明らかになつた。また、縄文時代晩期のものでは、後葉の滋賀里IV式・船橋式のものが、弥生式土器（第I様式・第II様式）と同一層内で出土した。

石器には、縄文時代に属するものと弥生時代に属するものがある。縄文時代のものとしては、石棒・磨石・石皿・石斧などがあり、その大部分が東方の標高82m以上の高まり（第14・22トレンチ）で出土した。弥生時代のものとしては、石槍・蛤刃石斧などがあり、いずれも第II様式の土器と伴に出土した。

木製品は、弥生時代中期の六足付盤が第13トレンチから出土した。また、縄文時代の丸木舟から古墳時代の準構造船に至る計5隻分の舟の1部が出土した。

第4章 出土遺物

1. 繩文式土器

今回の調査で出土した土器は、わずか1片の爪形文土器を除き、すべて縄文時代後期・晚期の縄文式土器である。これらの縄文式土器は、調査区の全域で出土し、その大半は、第III層（砂礫層）・第IV層（暗灰褐色砂層）中に包含される。

爪形文土器 (1)は、第14トレンチの第III層より出土した爪形文土器である。器壁は薄手で5mmを測り、色調は橙褐色を呈する。胎土は精良であるが、表面が非常に磨滅しており、同一層中の土器と異なる為、他所から流入したとも考えられる。時期は不明。

縄文時代後期の土器 前半から後半に至る後期全般の土器が出土しており、磨消縄文系・縄文地沈線文系・斜縄文系・沈線文系・条線文系・条痕文系・無文系の各文様帶の土器が出土している。

後期前半の土器では磨消縄文系に属するものが多く、幅の広い2本の沈線間に縄文を充填するもの(2~7)と、3本単位の平行する沈線文に縄文を充填するもの(8)があり、前者は瀬戸内地方の中津式に、後者は福田KII式に、それぞれ併行するものと考えられる。中津式の土器は、瀬戸内地方を中心として中国・四国方面に広く分布する土器であるが、当遺跡の出土例の中には、中津式に見られない口縁端上面にも縄文を付すものが認められ、中津式の影響下にある近畿地方の土器の特徴として把えられる。(8)は口縁部文様帶と胴部文様帶の区別の有無が不明で、厳密な意味での福田KII式とは判断し難い。

後期中葉の土器は、頸部と胴部が明瞭に区別されるのを特徴とする。文様帶としては、磨消縄文系・縄文地沈線文系・斜縄文系・沈線文系・条線文系・条痕文系のものがある。斜縄文系には、肥厚した口縁部の外面に施文したもの(9・10)と、体部外面に斜縄文を施したもの(17)がある。(9・10)は、口縁上端部を外側に肥厚させたもので、瀬戸内地方の津雲A式（彦崎KI式）に併行し、近畿地方では北白川上層式の中に認められる土器である。また、口縁上端部を内側に肥厚された稻口式にあたるものは確認されなかった。また、(11)の注口土器も、津雲A式の深鉢類と同時期のもの

であろう。沈線文系の土器には、器壁の厚いもの（15・16）と薄いもの（22・23）がある。（15）の深鉢は、4条の沈線がめぐり、頸部と胴部を横1条の沈線で区分する土器で、北白川上層式に属する。（16）は深鉢の口縁上端部に付く突起で、内面に押圧痕を残す。（15）と同じく、北白川上層式に属すると思われる。磨消繩文系の土器には、7本単位の平行する沈線内に繩文を充填するもの（19）と、器壁の薄いもの（14・20）がある。（19）は、細い平行沈線と縦方向に連続するS字状沈線で区切られる磨消繩文の深鉢で、水平の口縁部に突起を持つものである。この土器は、千葉県の加曾利南貝塚から出土する加曾利B I式の特徴を示すもので、滋賀県下では、大津市穴太遺跡など、東日本の堀之内式の影響を受けた遺跡で出土している。（14）は断面三角形を呈する縁帶文を持ち、最低4本の円弧を描く沈線がめぐる。或いは、繩文地沈線文系になろうか。（20）は波状口縁をもつ鉢で、斜線と弧線の細い沈線文を組み合わせた磨消繩文が施される。また、沈線文系の土器（22・23）も器壁の薄い波状口縁の鉢で、弧線と斜線を組み合わせた文様を呈し、（14）・（20）と同様に東日本の影響下にある土器として把えられる。条痕文系の土器には（28）の浅鉢があり、底部が大きく、口縁が外反する形態を示すもので、京都府舞鶴市桑飼下遺跡の第4群条痕文系土器の浅鉢Aタイプに類する。また、深鉢（18）の底部にも条痕が認められる。条線文系の土器には、（21）の鉢があり、外反する口縁部は肥厚する。後期中葉末の土器としては、元住吉山I式に類する深鉢（24）がある。この土器は、外反した頸部の上に立ち上がった口縁部をもつが、口縁部繩文帯と頸部無文帯の境を単に稜をもって区分するだけであり、元住吉山I式特有の横位の沈線が境界部に認められない。また、（12）の結節繩文も後期中葉末に多くみられる施文である。後期後半の土器としては、口縁部外面に、にぶい幅の広い沈線を3～4条めぐらした深鉢（25・26）があり、横位沈線文の集約部として、大きな丸い押圧文を施すもの（26）と、張付粘土の上を押圧するもの（25）があり、いずれも宮滝式併行期の土器である。近年、滋賀県下では、繩文後期末葉の資料が増加し、大津市穴太遺跡や高島郡今津町構遺跡周辺でも宮滝式の土器が確認されており、なかでも、穴太遺跡では「元住吉山I式→元住吉山II式→宮滝式」と推移するのに対し、長命寺湖底遺跡では、元住吉山II式の存在が認められない。また、沈線文を口縁部にのみ施される深鉢（27）は、他に類例が無いが、繩文帯を消先している点から考えて、宮滝式に併行する後期末葉の土器と推測される。

縄文時代晚期の土器 晩期の土器は、一部に晩期前半の土器を含むが、その大半は滋賀里IV式から船橋式に至る晩期後半の土器である。

器種は、甕・深鉢・浅鉢・鉢・碗があり、その種類も豊富であるが、整理の都合上、その詳細は本報告に委ね、概報では一部のみを紹介する。

(29・30) は碗類に属し、(29) は体部に 2 つの段を持つものと思われ、口縁部外面の中央部にヘナクリ様の巻貝を扇状に回転させて押圧した文様を持ち、底部は不明。(32) の浅鉢は、大きく外反する口縁部が波状口縁を呈し、肩部に明確な稜をなし、その径は口径とほぼ等しい。外面とともに丹念な磨きを施す。(33) は浅鉢の底部であり凹底を呈する。凹底の底部は出土量が多いが、いずれも中央部に剥落のあるものは認められず、滋賀里遺跡で確認された煮沸時における土器の固定方法と同じものは推測されない。(31) は刻みのない 1 条の突帯が口縁端部につけられる甕類の口縁端部よりやや下がった位置に刻み目を施した 1 条の突帯を巡らしている。また、次の船橋式に至っては、屈曲する肩部にも刻み目突帯を巡らせるようになる。(35) は籠状工具の原体端面を利用して幅狭にきざむ A タイプにあたる。(34・36～42) は籠状工具の平坦面を利用し、押し引きによって D 字形に刻む B タイプのもの。(43・44・45) は二枚貝状のものを利用して押し引いた D 字形の刻み目をもつ B' タイプにあたる。(46・47・48) は押圧によって長方形を呈する刻み目をもつ C タイプであるが、籠状工具の平坦面を利用したとは考え難い。また口縁端部を面取りするもの (37・38・43・45) と面取りをしないもの (34～36・39～42・44・46～48) があり、前者のうちには、上端部にも刻み目をもつもの (45) がある。

この他に、晩器の土器の出土から注目されるのは、甕類の体部上方に穿孔を受けたもののが 5、6 点あり、そのうちの 1 点については、この孔に樹皮を巻きつけた状態で出土した。この種の孔は、従来、補修孔として認識されてきたが、むしろ、土器の使用時において必要なものではないかと考えられる。

縄文時代晩期の土器は、出土遺物のうちで、かなりの量を占めており、層位によって、縄文時代後期の土器と共に伴したり、弥生時代前・中期の土器と一緒に出土したりしており、今後の整理作業によってその全貌が明らかになるだろう。

2. 弥生式土器

第III層（砂礫層）・第IV層（暗灰褐色砂層）中から、畿内第I様式・第II様式の土器が出土し、第II層（黄灰色砂層）の中からは、畿内第IV様式併行期の中期後半の土器が出土した。第IV様式の土器については、次の第II層出土遺物の項で説明を加えるとして、ここでは、中期前半までの遺物を紹介する。

第I様式の土器には、壺・甕・蓋形土器などがある。壺は沈線を持つものと、貼付突帯を持つものがある。(49)は、頸部からナデ肩の肩部にかけて8条の竪描き沈線文が施されており、(50)は、同じ箇所に遺存数8本の貼付突帯をめぐらしている。この突帯は刻み目をもち、本来は断面三角形を呈していたと考えられるが、土器の表面が非常に磨滅しており、現状では丸味を帯びている。甕(51・52)は、口頸部がわずかに外反し、頸部に4条の沈線を持ち、口縁端部に刻み目が施される。沈線間の幅の広いもの(51)と狭いもの(52)がある。(68)は蓋形土器で、扁平で円盤状に近い形状を呈する。周縁の対照的な位置に、2孔1対の穿穴を伴う。奈良県唐古遺跡や大阪府瓜破遺跡では、同種類の蓋形土器が畿内第I様式の土器と共に出土することが知られている。

第II様式の土器には、壺・甕のほか異形土製品が1点ある。壺には、口頸部の開きが少ない細頸壺(53・60・61)と、大きく開いた壺(54～59)がある。(53)の細頸壺は、直口の口縁部上方から櫛描直線文帯を連ねている。壺の施文帯の大半は櫛描直線文であるが、一部に流水文(56・62)・波状文が認められる。(60)の壺は、胴部に張りが無い器形を呈しており、器壁の厚い土器である。東海地方の土器かと考えられる。口縁部を逆八の字形に開いた壺は、いずれも器壁の厚い土器で、(54・55・58・59)は、口縁端部外面に櫛描の直線文を施した後、上部および下部から押圧したもので、頸部外面には、4～14条単位の櫛描直線文を施している。(57)は口縁端部をわずかに丸く肥厚させ、その上・下端に刻み目を施すタイプの土器で、山城・近江両地方の弥生時代中期前半代に多く見かけられるタイプの壺である。(56)は、外側に肥厚させた口縁上端部外面に櫛描波状文を持ち、頸部外面に6条1単位の櫛描直線文と櫛描流水文を施した壺で、上部の対称的な位置に2孔1対の穿穴が施されており、蓋が伴なうと考えられる。(63)は、ミニチュアの壺であり、頸部に竹管文を持つ。甕は、荒い刷毛目様の調整を受けており、口縁上端部に刻み目を持つもの(64・66・67)と、口縁部の下端を押圧するもの(65)があり、(65・66)は、口縁端部の数箇所を上部につまみあげるもの

ので、近江・東海地方に多く認められる技法である。これらの壺・甌類の土器は別に、異形土製品が1点出土している。異形土製品(69)は、長さ8.0cm以上・径4.7cmの把手状のもので、中空を呈し、外面に流水文が施される。

3. 第II層(上層)出土の遺物

第II層中には、各時期のさまざまな遺物が包含されている。中でも古いものには、縄文式土器や弥生式土器(第II様式)があるが、これらは大変磨滅しており、本来、下の層位中の遺物として考えられるので、ここでは説明を省略する。第II層から出土した遺物を大別すると、弥生式土器(第IV様式)・古式土師器・飛鳥時代の土器・平安時代の土器・中世の土器となり、さらに木製品・石製品・人骨等が出土している。

弥生式土器 縦内第IV様式に伴行する時期の甌類が出土している。(70)は胸部のあまり張らない縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して直線的に外方へのびる短い口頸



写真2. 上層出土遺物

部がつく。外面には刷毛目が施され、胸部最大径の位置に刺突文がみられる。小形の壺である。(72~77)は受口状口線を持つ壺類で、体部外面に刷毛目を施すもの(72)、櫛描直線文・波状文を施すもの(76)、これに刺突文が加わるもの(73~75・77)があり、口径19.4cmの大形のものまで種類が豊富である。このうち(72)は、体部的最大径が口径より小さく、同じ受口状口線の壺として分類するには、やや疑問の残る器種である。

古式土師器 庄内・布留の両時期に相当するものがある。庄内式伴行期のものとしては、(78・79)がある。(78)は、口縁部を「く」字状に曲折させており、(79)は、受口状口縁を有するもので、口縁端部が外方にのび、外面に櫛描直線文が施される。この他に、チョコレート色の色調を呈して、細かい叩き目を外面に施した庄内式上器も出土している。布留式伴行期のものとしては、(82)の小形丸底壺、(81)の高杯などがある。小形丸底壺は体部最大径が口径よりも大きいもので、外面に横方向の箝削りを受ける。(81)の高杯は、ほぼ全面をていねいに磨かれている。(80)も頸部内面の肥厚が認められることから、同時期のものと考えられる。

飛鳥時代の土師器 長胴の壺(87・88)と椀(84~86)がある。壺には、口縁部が外反して開くタイプ(88)と内弯気味に開くタイプ(87)に別かれる。下半部が欠損しているかめ、性格な年代はつかめないが、(88)は肩部にヘラ記号を持っており、須恵質に近い土師器である。椀には、口径12.0cmから15.0cmのものまでがあり、手法もナデ調整と刷毛目調整が認められる。この時期の土器としては、この他に、鍋・暗文付皿・杯などがある。

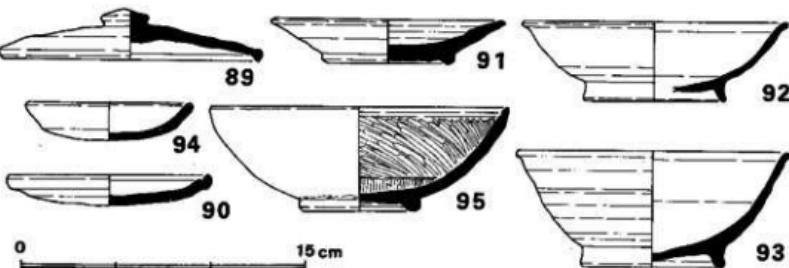


図7. 第II層出土遺物実測図

平安時代の土器 平安時代中期を中心とした須恵器・土師器・灰釉陶器などがある。(89)は須恵器の杯蓋で内面を硯として転用している。(90)は、口縁端部を屈曲させた土師皿で、10世紀～11世紀にかけてのものである。(91)は灰釉陶器の皿、(92・93)は同じく碗である。(94・95)は黒色土器であり、(94)の皿は磨滅して暗文が消失している。この他の遺物では、緑釉陶器などがある。

4. 石製品

出土した石製品の中には、縄文時代のものと弥生時代のものがあり、いずれも第III層（砂礫層）もしくは第IV層（暗灰褐色砂層）からの出土である。

縄文時代のものには、磨石（96）と石棒（97）がある。磨石は径10.0cm、厚さ4.9cmを測り、安山岩製。石棒は長さ35.0cm・径9.1cmを測り、湖東流紋岩の一種である角閃石安山岩を素材とする。長命寺湖底遺跡出土の縄文時代石製品の多くは、この角閃石安山岩を石材としている。今回、紹介していない石製品には、石斧・石皿・御物石器などがある。弥生時代の石製品には、石槍（98）と石斧（100～102）などがある。

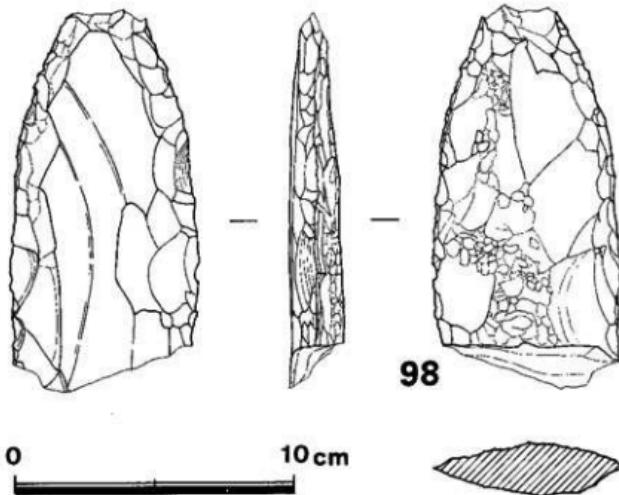


図8. 石製品実測図

石槍は先端部と根本の両端が破損しているが、残存部が 13.4 cm あり、幅 6.8 cm、厚さ 18 mm を測るもので、一見すると旧石器のポイントに類似する。石材はサヌカイト。

5. 木製品

出土した木製品は、舟・櫂・盤である。

舟は合計 5 隻分が確認され、そのうち 2 隻の丸木舟が縄文時代晩期の土器とともに出土した。また、第 II 層（黄灰色砂層）中から、布留式土器とともに準構造船の船首が出土した。

木製の盤は 6 足を持つもので、弥生時代の第 II 様式の包含層から出土した。

第5章 まとめ

約13ヶ月間にわたって実施した長命寺湖底遺跡の発掘調査も、昭和59年3月25日をもって終了したが、調査によって生みだされた問題点をいくつか整理しておきたい。

1. 旧地形の復元

調査の時点で常に問題となったのは、各時代の水位の変動である。今回の調査では、縄文時代後期初頭から中・近世に至る時代幅のある遺物を確認することができたが、その各時期ともに調査地が湖底であったのか否か、疑問がもたれた。本調査時において、遺物の出土が認められたのは、粘土層の直上面までであり、その遺物は、上層の遺物に比べて非常に残りの良いものであった。これによって、地山である粘土層を細かく測量することで、当時の旧地形が復元できると考えられた。層位の上で言えば、第III層である砂礫層より下層は、非常に安定しており、縄文時代後期初頭から弥生時代中期初頭の遺物を含んでいる。問題となるのは、その時期の汀線を旧地形上に復元できるか否かということである。結果として、縄文時代晩期の汀線が標高81.70m(T.P.)前後に求められた。この根拠の1つは、丸木舟や櫂を始めとする木製品の多くが、この標高から出土した事。2つは、地山の青灰色粘土層がこの標高前後で黒褐色の有機質粘土層と変わる事である。この黒褐色粘土層には、スクモが混入しており、汀線付近のクスモが、さらに分解して青灰色粘土層を有機質化したものと考えられる。3つは、第III層の砂礫層が、水位の上昇に伴って堆積したと考えられ、この層を上・下して、遺物の内容が変わることである。以上の点より、現在の琵琶湖の水位(T.P.+84.371m)から約2m70cm低い標高81.70mの前後に旧汀線があったと考えられ、縄文晩期の丸木舟が、直線波を受けない入り江で発見されたことからも理解されよう。

(図3. 第2・3トレンチ地形図参照)

この汀線を追っていくと、調査区の東端にあたる第14・22トレンチに地形の高まりが見いだされ、遺物の出土量が増え、石棒・磨石・石皿などの石製品も認められるようになる。こうした事から、遺跡の住居区が調査地の東方に堆定され、現在の長命寺川によって旧地形を破壊されていることが理解できる。

ここで復原された汀線は、出土遺物の絶対量から、縄文晩期のものと考えられるが、それより古い縄文時代後期になると、対岸の元水茎遺跡の丸木舟の出土標高との間にかなりの開きがあり、今後の周辺遺跡の調査結果によって次第に明らかにされよう。

2. 丸木舟

今回の調査で1番注目をあびたのは、縄文時代晩期の丸木舟であった。この舟は、全長6m・幅60cmを測るもので、大まかな形づくりの後、火中にて整形し、仕上げとして磨きがかけられているようである。丸木舟を出土した遺跡としては、千葉県加茂遺跡、神奈川県鳥浜貝塚をはじめとして、数多くあり、滋賀県下では、近江八幡市元水茎遺跡、蒲生郡安土町大中の湖南遺跡で合計7隻の丸木舟が出土している。今回の丸木舟は、縄文時代晩期の遺物包含層より出土しており、滋賀里IV式の深鉢が年代を決定する根拠になったが、この種の遺跡は、陸上での堆積と異なり、廃棄後に水中での再堆積が加わるため、絶対的な年代には認め難い。また、使用目的として、漁業ないしは湖上交通の手段と説明したが、今回の調査では、切り目石錐などの漁具に関係した遺物は一切出土しておらず、また、水上交通の対象も、その構造から内湖周囲に限られたものであろう。

3. 縄文時代後期の土器

1片の年代不明な爪形文土器を除き、長命寺湖底遺跡の出土遺物は、後期初頭の中津式併行期にはじまり、稀薄ではあるが、福田KII式併行期へと続く。後期中葉では、瀬戸内の津雲A式（彦崎KI式）へ移行し、関東方面の堀之内式の影響を受けない。これは縁帶文の土器や注口土器の形態からも理解される。また、対岸の元水茎遺跡も彦崎KI期のものとされ、同じ傾向を示すようである。これに続く中葉末頃に至ると、加曾利BI式の土器が出現するが、これは、称名寺寺→堀之内I式→堀之内II式・加曾利BI式と推移する流れものではなく、丹後地方をはじめとする日本海側の土器文化に影響をあたえた加曾利BI式の流れに沿ったものと考えられる。近畿地方全域では、後期中葉までの堆積が大別にして2通りある。1つは、堺市四ッ池遺跡に代表される「中津式→福田KII式→（津雲A式）」といった瀬戸内的な発達であり、もう1つは、東大阪市綴手遺跡に代表される「中津式（称名寺式）→堀之内I式→堀之内II式」

といった関東的な発達である。滋賀県下においては、大津市穴太遺跡が後後に近い推移をするのに対し、長命寺湖底遺跡では、前者に近い瀬戸内的な推移を示しながら、北白川上層式の影響下に入る。この時点で、関東系の土器をともなうのは、加曾利B I式の影響下で独自の発達を示した丹後の桑飼下遺跡などからの影響によるものであろう。後期中葉末から後半に至って、通常は「元住吉山I式→(元住吉山II式)→宮滝式」と移行するが、当遺跡では、明確な元住吉山式が現われず、県内の湖北町葛籠尾崎遺跡・大津市穴太遺跡などで明確な元住吉山式を見るのと様相を異なる。しかしながら、後期末では宮滝式を出土するようになり、後期全般の時期を埋めつくし、出土地点が調査区の西方から東方へと移行するのが明らかになった。

4. 繩文時代晚期の土器

出土した晚期の土器は、整理が進んでいない事もあってか、今のところ、晚期後半の滋賀IV式・船橋式が大半をなす。晚期の土器については、これまでのところ器種の分化と各名称の統一がはかられていない為、概報では突帶部の分類のみをおこなった。土器の出土状況は、晚期の土器のみが出土する層位と、弥生式土器（第I様式・第II様式）と共に伴する層位が認められた。調査の初期には、繩文式土器の磨滅が少ないので対し、弥生式土器の表面が磨滅している事から、弥生式土器の流入による再堆積を考えていたが、一部では残りの良い弥生式土器が繩文式土器と共に伴することが認められており、より慎重な遺物整理の必要が生じている。

5. 弥生時代中期の土器

第III層の砂礫層を挟んで、上層では第IV様式の土器が、下層では第II様式の土器が出土し、両者の間に急激な湖水面の上昇期が堆積される。下層から出土する土器は、全て第II様式までの時期におさまり、第III様式の土器を1点も含まない。これらの土器は、壺・甕が大半をなし、山城地方の深草遺跡や中臣遺跡にまで影響を及ぼしている近江系の土器であり、甕は口縁の上端部を數箇所、上方へつまみ上げる。壺は口縁端部に刻み目をつけたものが多くバラエティーに豊んでいる。同時期のみの土器が把えられるのも、湖底遺跡の恵まれた点である。

また第IV様式併行期の土器は、大半が近江特有の受口状口縁を持つ甕で、凹線文系

の土器はもとより、甕以外の器種が認められない点に疑問が持たれる。この時期の土器は、縄文式土器に次いで残りが良く、同時期の遺跡の中心が非常に近いことを物語っている。

6. 調査上の問題点

今回実施した調査は、鉄製鋼矢板の仮締切によっておこなったが、自立式鋼矢板の限界や水位上昇に伴う漏水の増加などがあり、陸上と同じ条件での調査は不可能であったが、かなり、それに近い状態でおこなうことができた。しかしながら、1度排土したもの再確認などができず、また、必要に応じて設定した排水路が、土中の丸木舟を破損するなど、調査上、かなりの失敗を繰り返した。今後、改良できる点を改良し、陸上と同じ条件で湖中を調査できる日の来ることが望まれる。

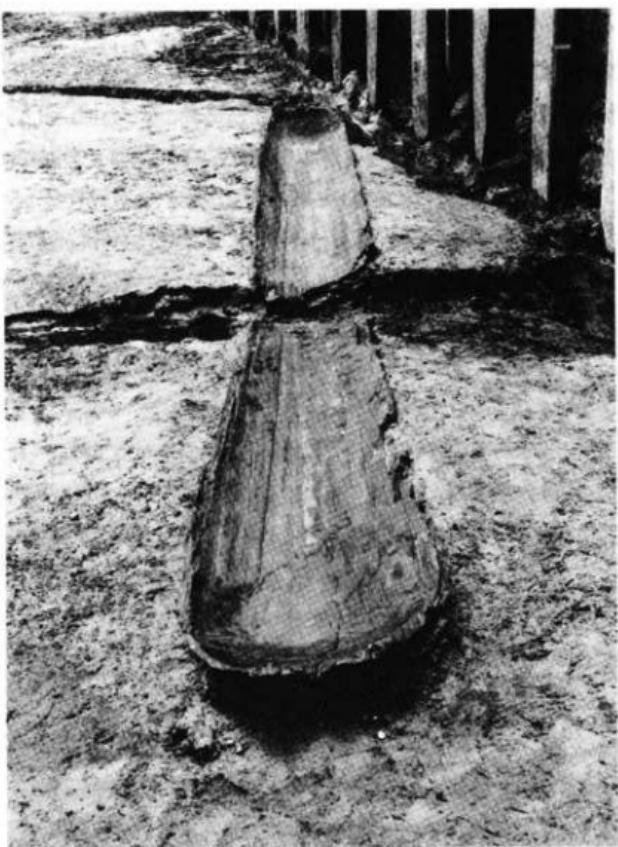


写真 3. 縄文時代晩期の丸木舟



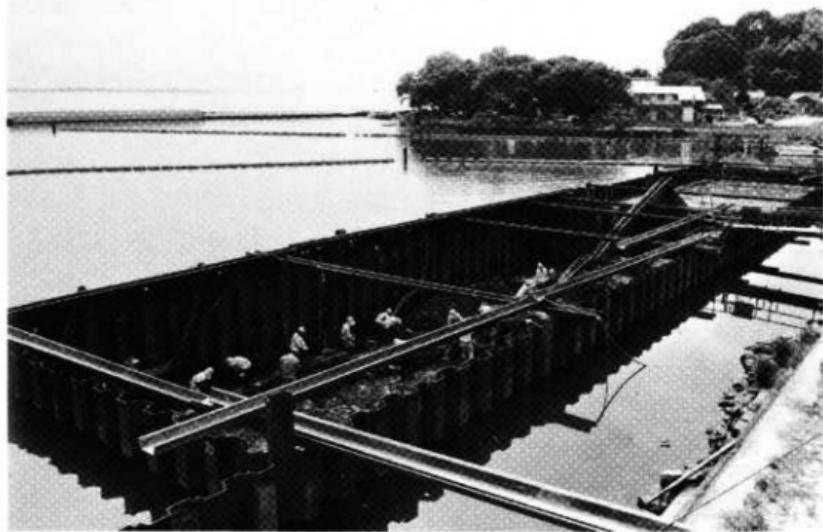


調査前状況（東より）

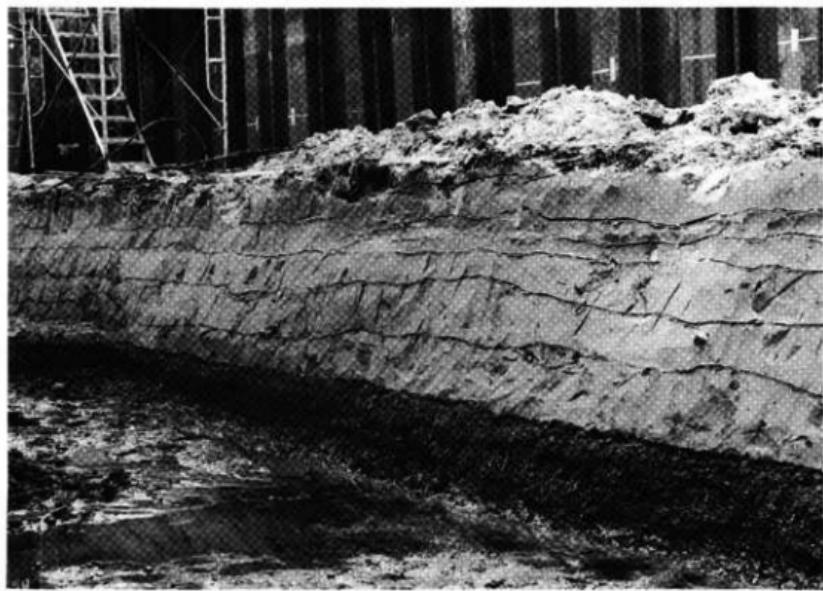


鋼矢板設置状況（第3・4トレンチ）





調査風景（第7トレンチ）



土層堆積状況





遺物出土狀況（繩文式土器）



遺物出土狀況（繩文式土器）





遺物出土狀況（彌生式土器）



遺物出土狀況（櫛）



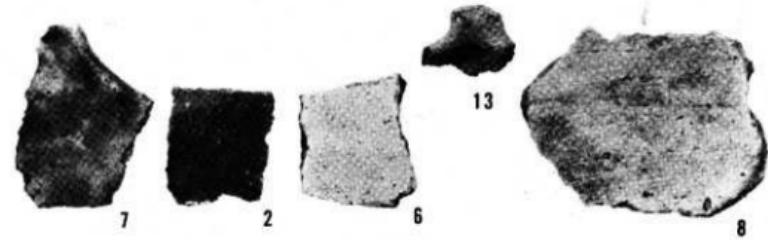
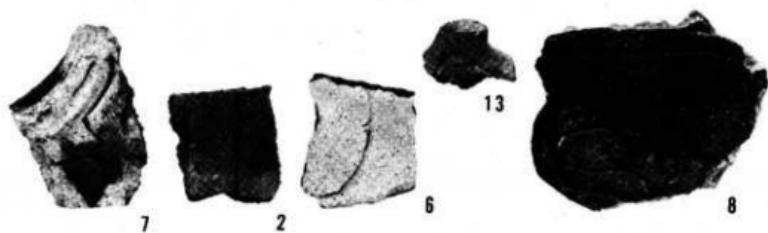
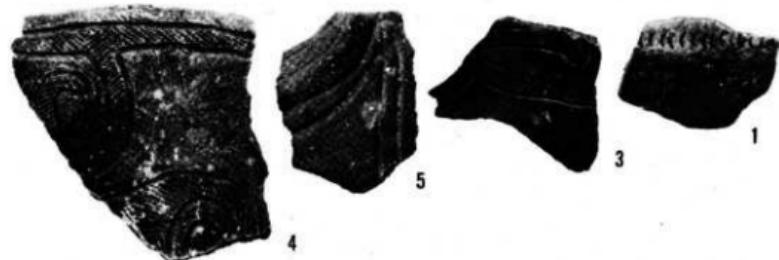


第8 トレンチ調査状況



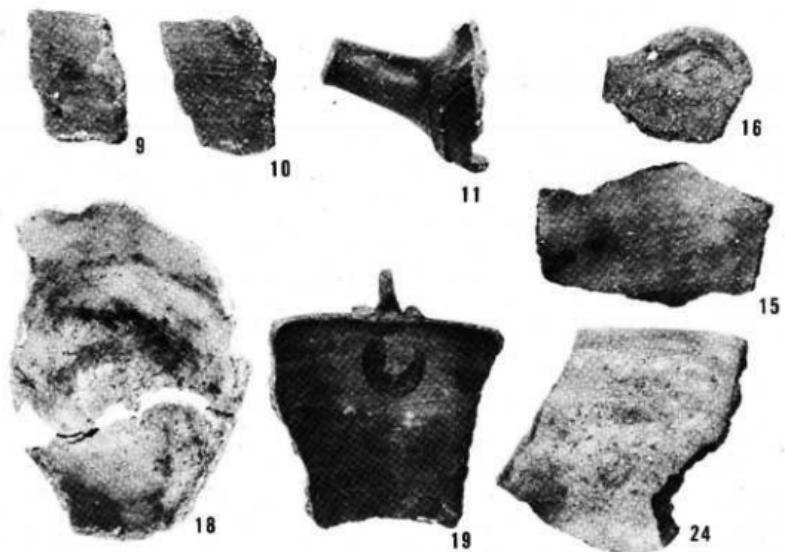
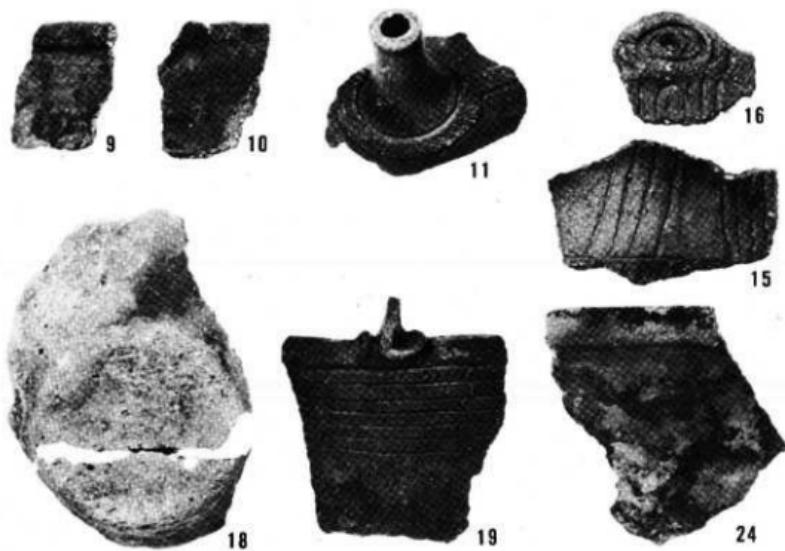
丸木舟出土状況（北西より）





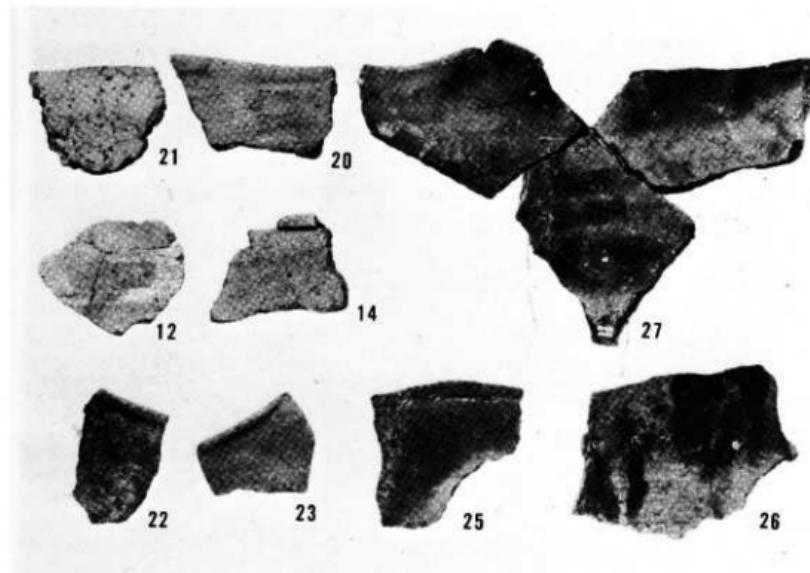
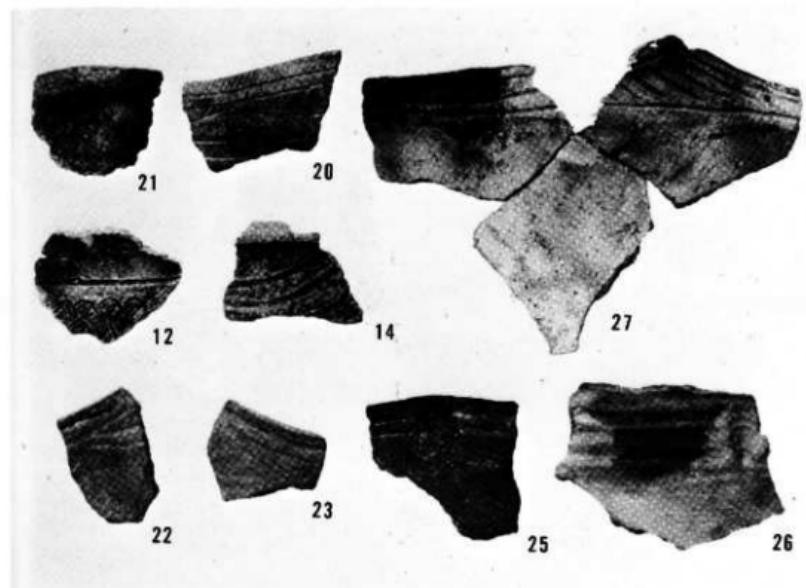
出土遺物（縄文時代後期）





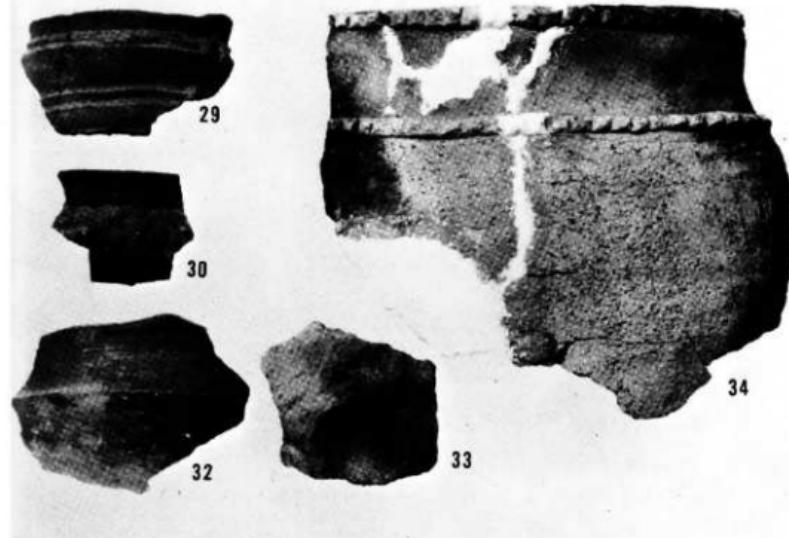
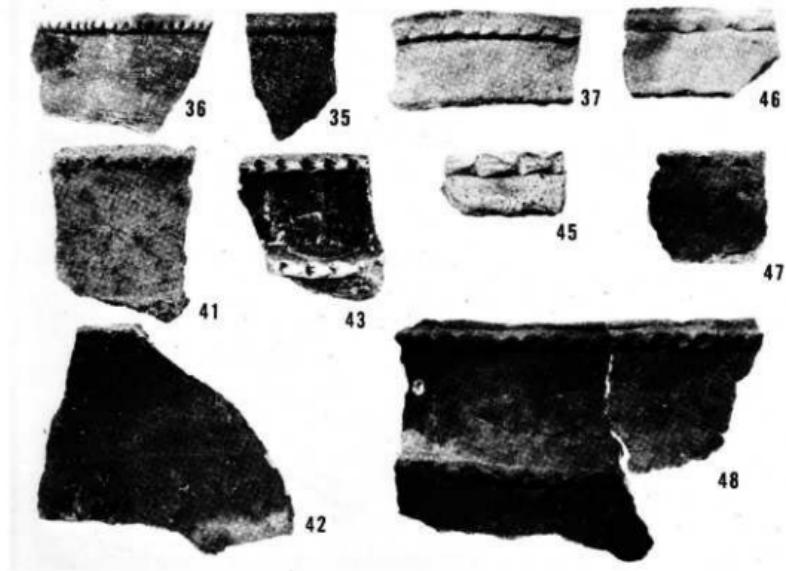
出土遺物（縄文時代後期）





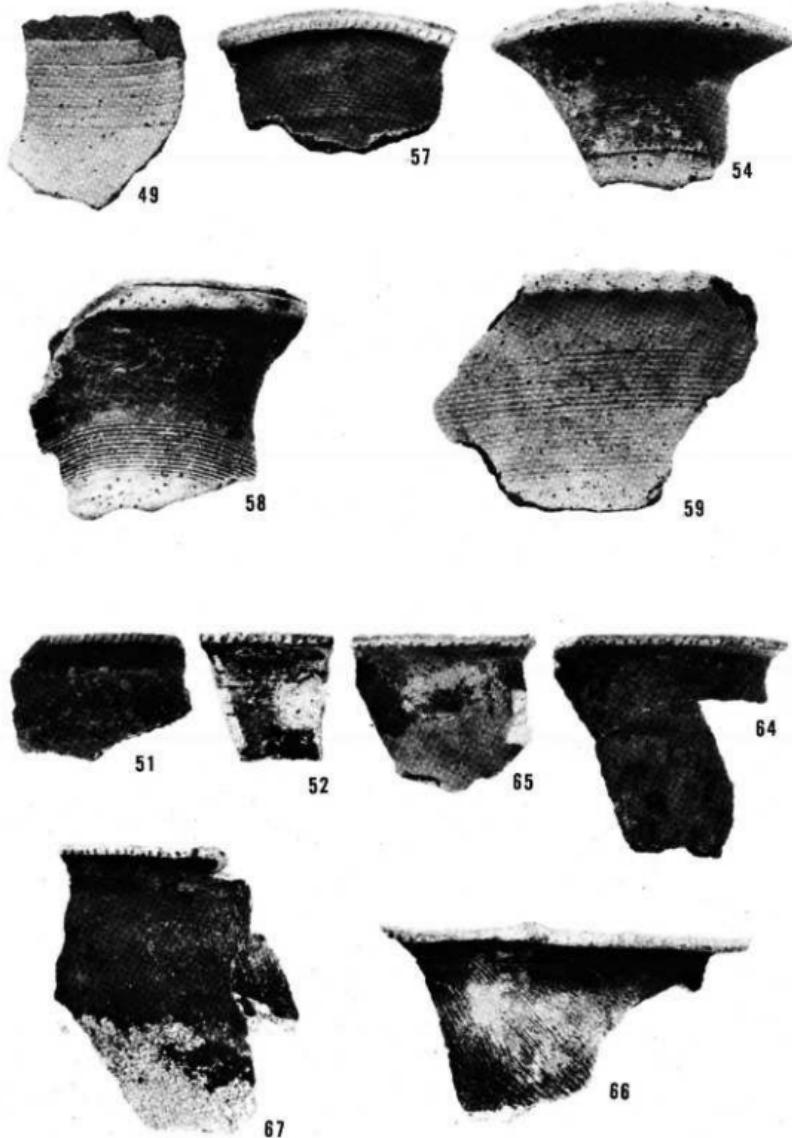
出土遺物（縄文時代後期）





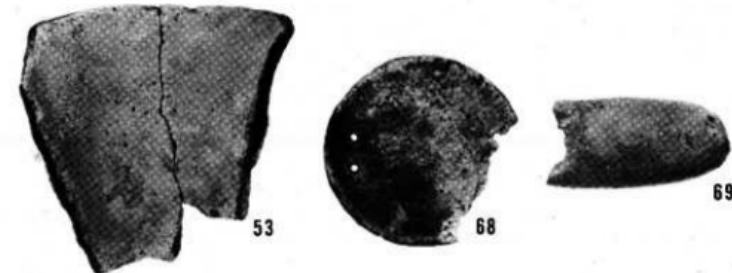
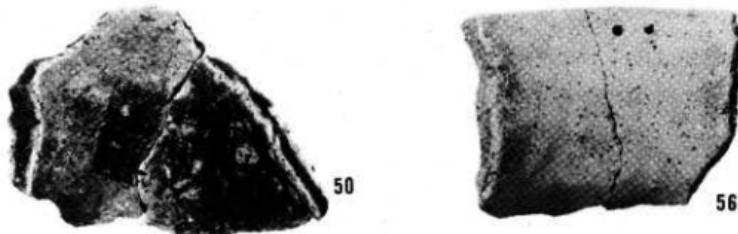
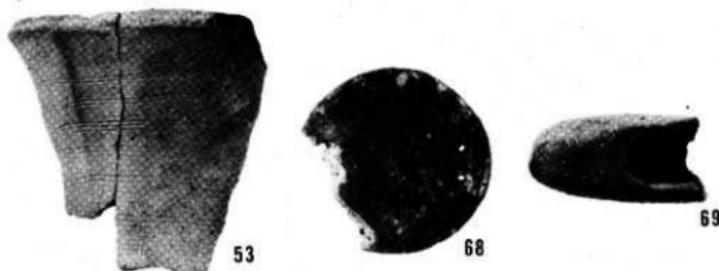
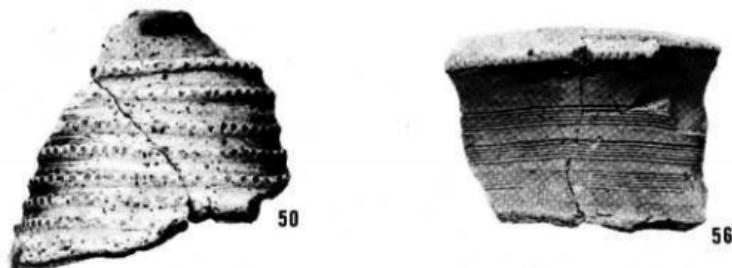
出土遺物（縄文時代晩期）





出土遺物（弥生時代前期・中期）





出土遺物（弥生時代前期・中期）





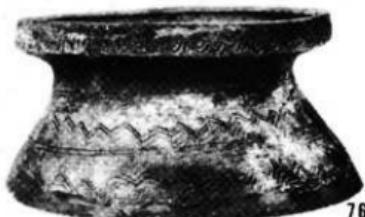
28



60



31



76



63



74





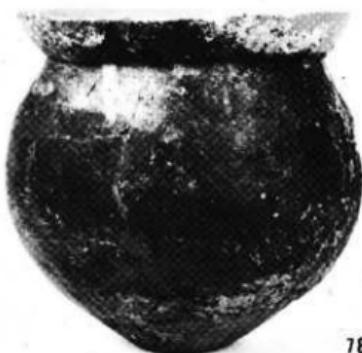
77



73



70



78

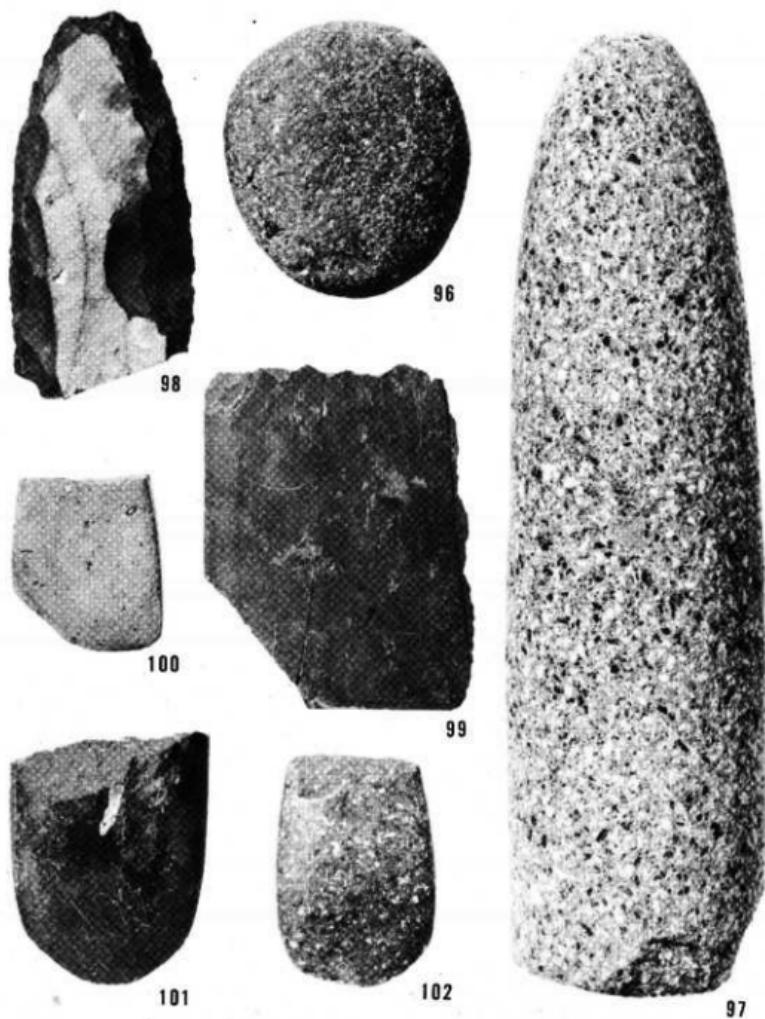


81



82

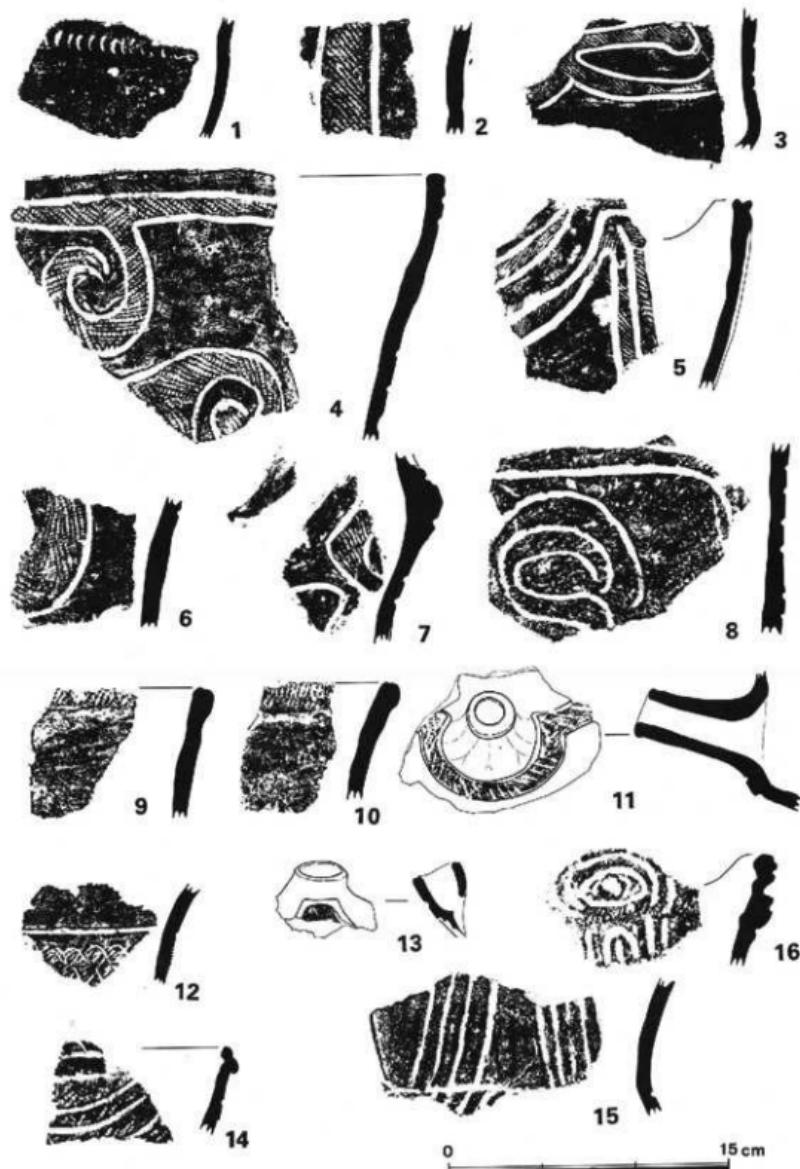




出土遺物（石器）

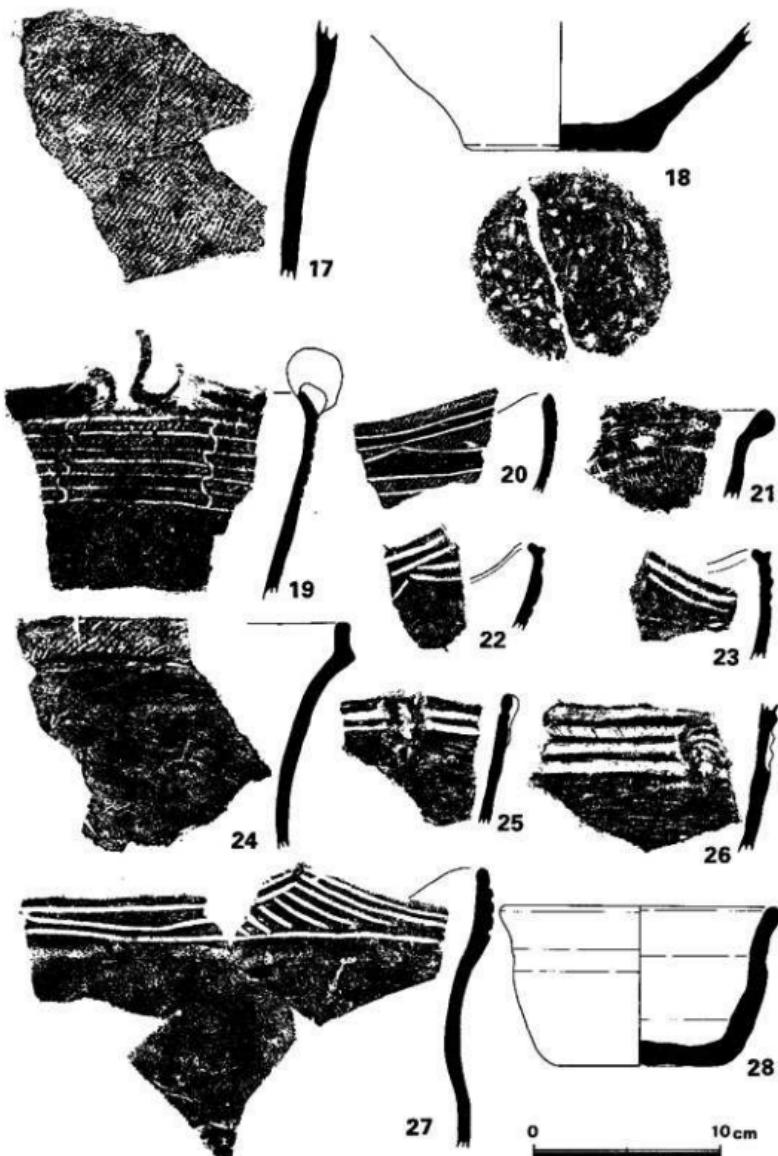


図版十五 遺物実測図（縄文時代後期）



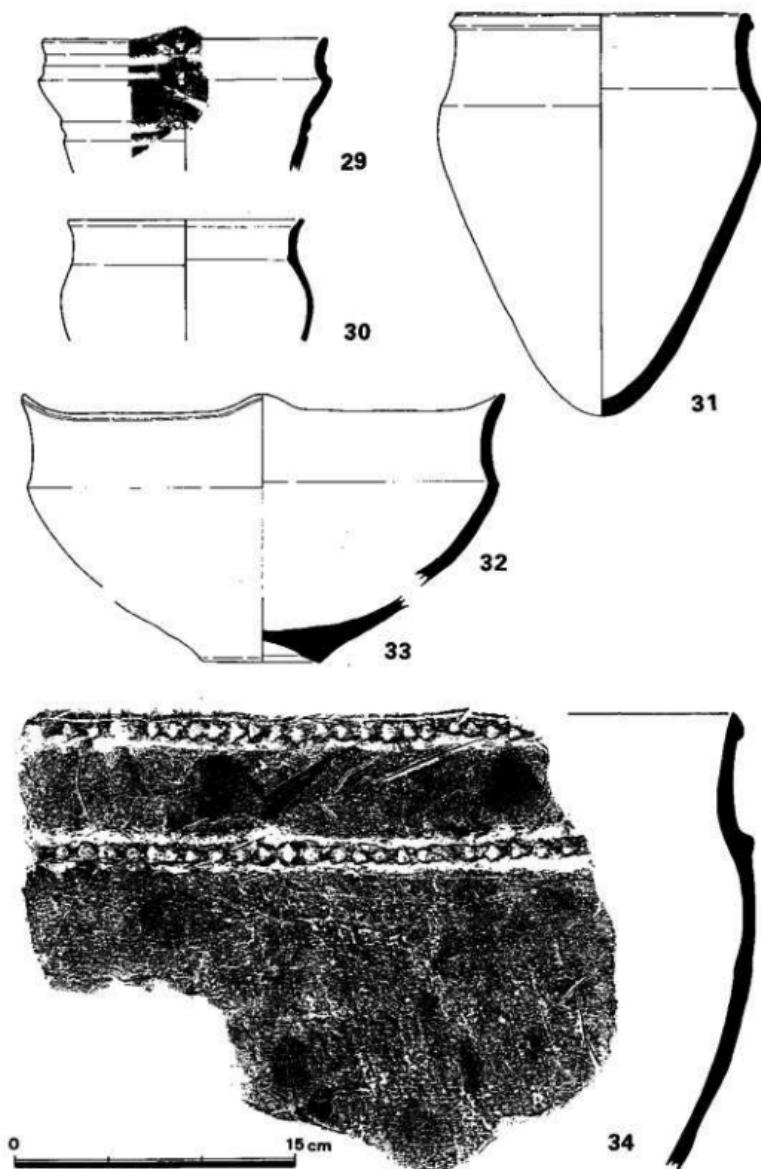


図版十六 遺物実測図（縄文時代後期）



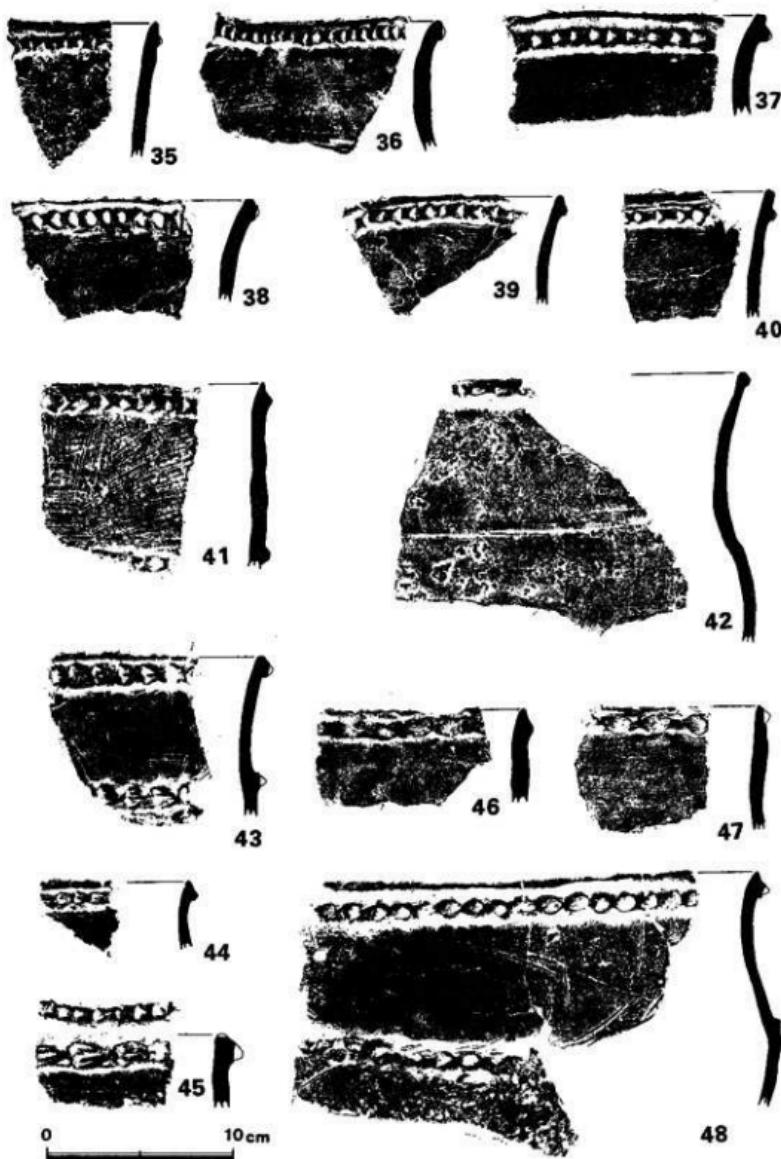


図版十七 遺物実測図（縄文時代晩期）



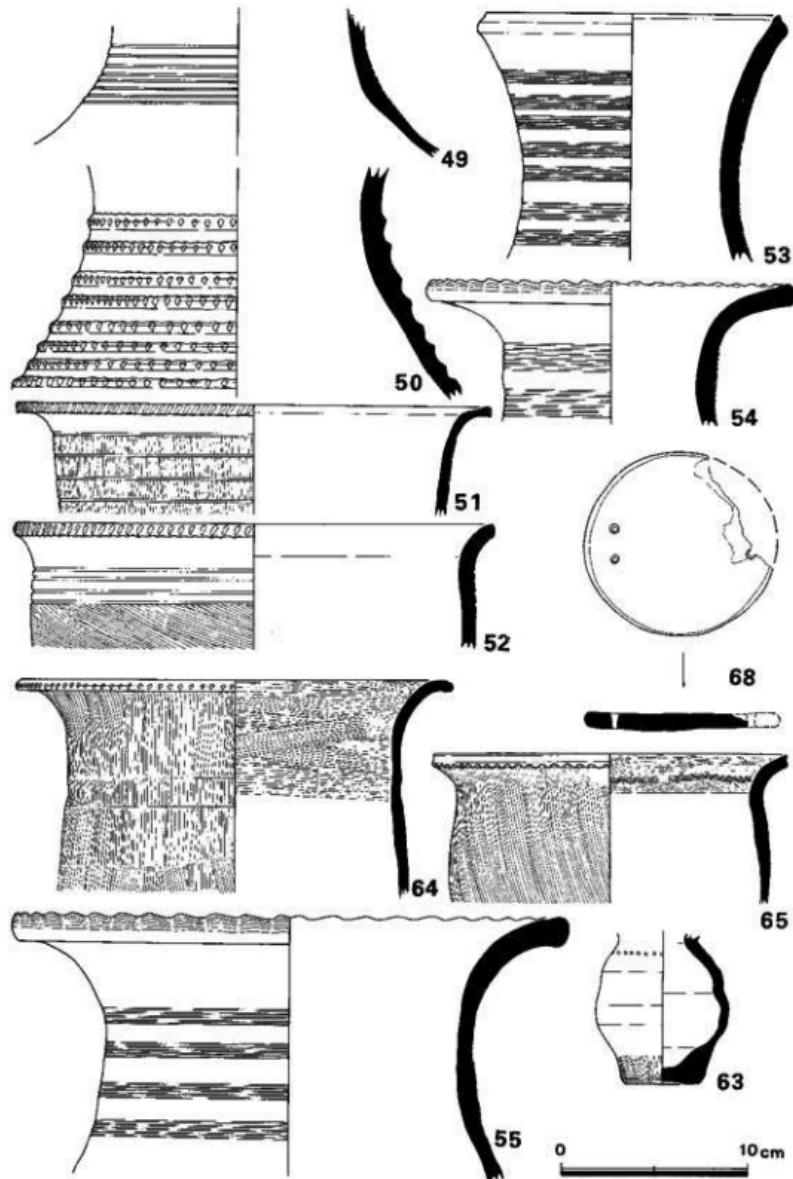


図版十八 遺物実測図（縄文時代晩期）



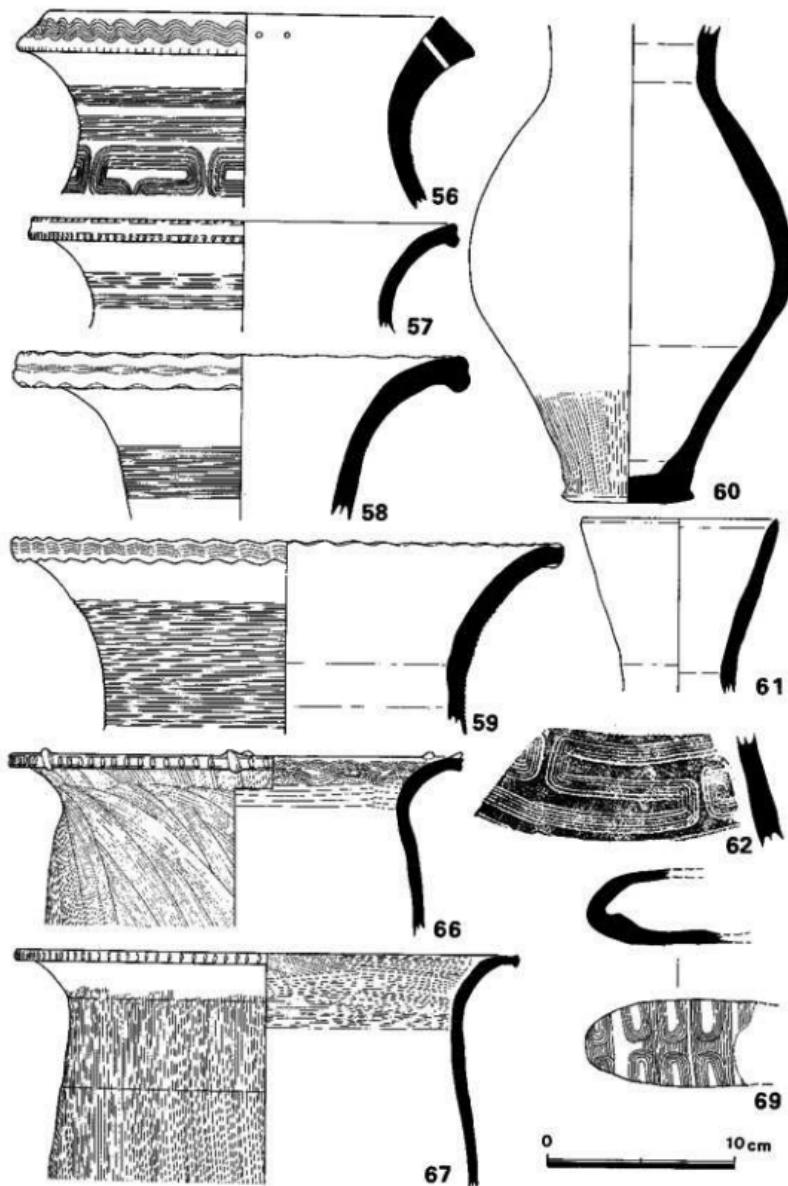


図版十九 造物実測図（弥生時代前・中期）



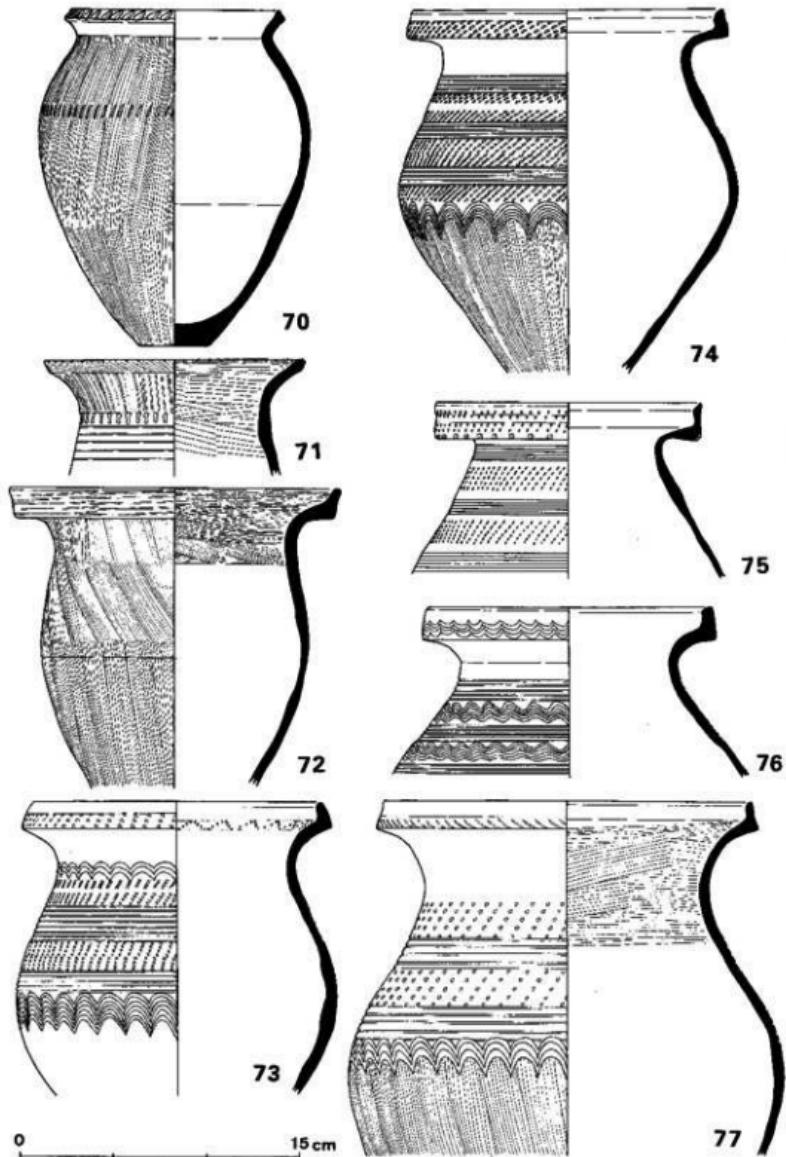


図版二十 遺物実測図（弥生時代中期）



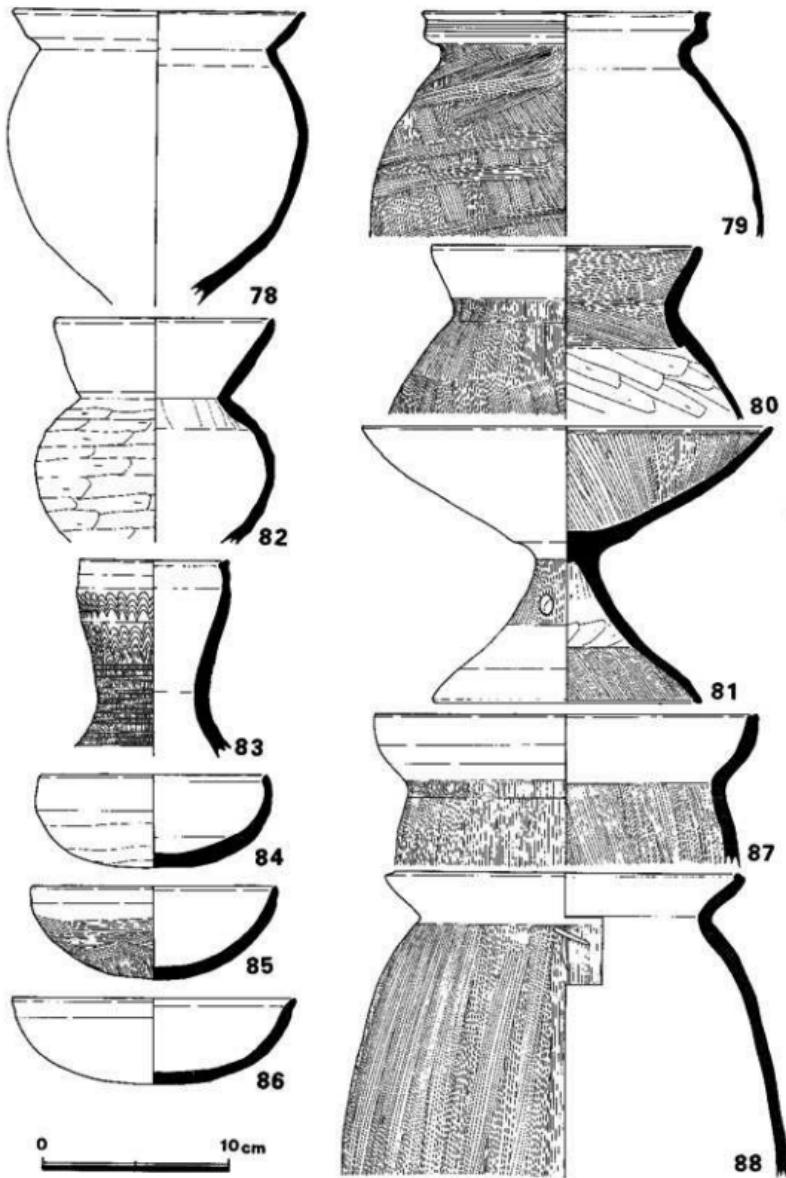


圖版二十一 遺物実測図（弥生時代中・後期）





図版二十二 遺物実測図（古式土師器・土師器・須恵器）



0 10 cm

長命寺湖底遺跡調査概要

—近江八幡市—

1984年3月25日

編集・発行 滋賀県教育委員会
財團法人 滋賀県文化財保護協会
印刷所 宮川印刷株式会社
